

大島が出来る話

菊池寛

青空文庫

苦学こそしなかったが、他人から学資を補助されて、辛く学校を卒業した讓吉は、学生時代は勿論卒業してからの一年間は、自分の衣類や、身の廻りの物を、気にし得る余裕は少しもなかった。

学生で居た頃は、彼はニコニコの染そめがすり 紺ぬいなどを着て居た。高等程度の学生としては、粗服に過ぎて居た。が、衣類に対しては、無感覚で無頓着であつた讓吉は、自分の着て居る紺が、ニコニコであるか何であるかさえ知らなかった。

そして豪放と云う看板の下に、自分の粗服を少しも気に掛けまいとした。實際また気に掛けても居なかった。

が、讓吉が一旦学校を卒業してからと云うものは、服装を調ととのえる必要を痛切に感じ始めたのである。彼が学生時代から、ズーツと補助を受けて居る、近藤氏の世話で××会社に入社した当初は、夫それが不快になるまで、自分の服装の見すばらしさを感じたのである。

夫は夏の終であつたが、彼は、初はじめて出社すると云うのに、白地の木綿紺を着て居るに過ぎなかった。

課長と、初対面の挨拶あいさつが済んでから、彼は同僚となるべき人々に、一々紹介された。

「岡村君に吉川君。」と、課長は最初に、二人の青年を紹介した。岡村と云われた青年は、中肉の身体からだにスツキリと合つて居る、琥珀色こはくの、瀟洒しょうしゃな夏服を着て居た。そして、手際ぎわよく結ばれた玉虫色のネクタイが、此この男の調つた服装の中心を成して居た。吉川と云う方は、明石縮あかしちぢみの単衣ひとえに、藍無地あゐむじの縞ろの夏羽織を着て、白っぽい縞はかまの袴はを穿はいて居た。二人とも、五分も隙すきのない身装みなりである。夏羽織も着て居ない讓吉は、此この二人の調つた服装から、可なり不快な圧迫を受けた。夫は、対手あいてが人格的に、若もしくは学問的に、また道徳的に、自分に優越して居る為ために受くる圧迫とは、全く違つて居る。考えて見れば下らない事かも知れなかつた。が、夫にも拘かかわらず、その圧迫は、可なりに重苦しく、不快なものであつた。岡村と吉川との、二人ばかりではなかつた。その後から紹介された、十五六人の人々は、一人として、讓吉のような、見すばらしい様子はして居なかつた。

讓吉はその後、一週間ばかり、毎日自分の服装の不備つに就ついての、不快な意識を続けて居た。其その裡うちに漸ようやく、讓吉の世話になつて居る、近藤夫人の好意になる背広が、出来上つたのであつた。

自分の家が貧しい為ため、何等なんらの金銭上の補助を仰ぎ得ない讓吉に取つては、近藤夫人が何かにつけて唯一の頼りであつた。讓吉が高等商業の予科に在学中、故郷に居る父が破産し

て危く廃学しようとした時、救い上げて呉れたのは、讓吉の同窓の友人であつた近藤の父たる近藤氏であつた。夫以來讓吉はズーツと、学資を近藤夫人の手から仰いで居た。が、近藤夫人の讓吉に対する厚意は、ただ学資の補助と云う、物質的の恩恵には、止まらなかつた。

讓吉に対する夫人の贈与なり注意には、常に温い感情が、裏附けられて居た。その温情を讓吉は、沁々と感じて居るのであつた。学資ばかりでなく、讓吉は、衣類や襯衣や、日用品の殆ど凡てを、近藤夫人の厚意に依つて、不自由しなかつたのである。

学校を出てからも、讓吉は近藤夫人の庇護なしには、何うともする事が出来なかつた。

「富井さんも愈々口が定まったのなら、孰れ洋服が入るでしょうから、三越へそう云つてお調らえなさい。少しいのを調えた方が結局は得ですから。」と讓吉が、入社が定まつた事を報告に行くと、夫人は祝辞を述べてから、直ぐこう云い出した。讓吉は夫人に金を借りてでも、洋服を新調したい積りであつたから、夫人のこうした好意は、骨身に浸みる程、有り難く感じたのである。無論、近藤夫人の好意は、洋服丈には止まらなかつた。「色々の身の廻りの物が入るでしょうから。」と云いながら、夫人は新しい十円札を三枚、讓吉の前に差し出した。

讓吉は、過去に於て幾度、夫人の華奢な手から、こうした贈与を受けたかも知れない。その度に讓吉は、夫人から受くる恩恵に狎れて、純な感謝の念が、一回毎に、薄れて行かぬよう、絶えず自分の心を戒しめて居た。讓吉は、此日三十円を受けながら、卒業してから尚、夫人を煩わして居ることを少しは情なく思ったが、夫人に頼らずには、實際何も出来なかつた。が、夫人から、金銭の贈与を受ける事だけは、もう今度で済ませたいと、心の裡で思った。

夫人の好意に依る、背広と三十円とは、讓吉が今迄感じて居た、不快な圧迫に対する、最上の对症薬であつた。入社した二三週間目からは、讓吉も自分の服装に相当の自信を以て、快活に働いて居たのである。

その内に、讓吉の生活にも、僅かながら余裕が生じて来た。殊に、学校を出た翌年、近藤夫人の尽力で結婚して以来は、更に月々相当の余裕を生じた。夫人は、讓吉の為に相当の資産家の娘を世話して呉れたからである。

夫に連れて、讓吉の服装も段々調つて来た。結婚の時に、近藤夫人は讓吉の為に、フロックコートを新調して呉れたし、その外にも讓吉は、四五着の背広やモーニングを持つようになった。和服も上等ではなかつたが、時候に相当した物を、一二着宛調えて行く事が

出来た。殊に彼の妻は、女性に特有な、衣類に対する敏い感覚と、執着とを持つて居た。

「もう、セルを着て居ないと、見つともないわ。」と云い出すと、彼の妻は、讓吉がセルを買つてしまふ迄は、五月蠅くその提言を繰返した。讓吉が金の都合で、何うしても応ぜぬ時などは、自分の小遣錢で、黙つて買つて来て、讓吉に内緒で縫つて置いた。そうして、讓吉が改まつて外出する時などは、「之を着て行かない！」と、不意に彼の眼の前に、仕立下ろしの衣物を、拵げて見せたりした。

が、讓吉の力でも、彼の妻の力でも、何うしても、出来ない着物があつた。夫は大島おおしまの拵である。殊に讓吉の妻は、彼の為に大島を買う、熱心な主張者であつた。

「男には大島が一番よく似合つてよ。貴方も、是非大島をお買いなさい、夫も片々じゃ駄目だわ。何うしても羽織と、着物とを揃えなけりや。是非お買いなさいよ、一疋買うといんだから、今年の秋迄には是非お買いなさいよ。男は大島に限るわ。」と、彼の妻は、着物の話が出る度に、屹度大島を讚美したが、讓吉の月々の余裕と云つても夫は二三十円と、纏つた金でなかつた。又彼の妻としても、一度に三四十円も出す力は持つて居なかつた。従つて一疋六十円以上もする大島は、当然讓吉夫婦の購買力の上に在つた。

「大島を買う金なんかあるもんか。」と、讓吉が妻のしつこい提議に対して、吐出すよう

に云うと、「だから貯金をなさいよ。貴方は喰道楽だから、お金が蓄^{たま}らないのよ。毎月五円宛貯金をなさいよ。そしたら、今年の秋迄には、大島が出来るわ。」と彼の妻は、よくこんな事を云つて居た。讓吉も冗談に、

「じゃ、その『大島貯金』をでもするかな。」と応じた。が一種の享^{エビキュリアン}樂者である彼は、着物を購^{あがな}う為に、貯金迄する気は、何うしても起らなかった。が、彼は妻に依つて、大島の美点と長所とを詳細に説かれてからは、段々大島に対する執着を覚えて来た。銀座通を歩いて居る時など、よく呉服屋の見本棚の前に足を止めて、其^{そこ}処に飾られてある、縞^{しま}柄のよい大島緋を、熟視して居る自分の姿に気が附いて、思わず苦笑する事も屢^{しばしば}々あつた。その裡に秋が来て、冬物を着るシーズンとなつても、大島の揃は、中々出来る様子は見えなかつた。妻はよく讓吉に、

「貴方のように、ケチケチして居ては、何時^{いつ}が来たつて買えやしないわ。少し無理をしても、思切つて買うといいんだわ。買った後で余儀なく儉約して埋合せを附ければいいんだわ。」と、云つた。金遣いにかけては、貧家に育つた讓吉は、可なり小心であつた。とても疾病^{しっぺい}などの準備として預けてある貯金を、引き出して迄、大島を買う気にはなれなかつた。また彼の妻程大島に対して強い執着を、持つても居なかつた。

讓吉に取つて、大島の揃は出来ずに、年が暮れた。すると、新年になつて、年始かたがた旁々讓吉の家を訪ねた友人の杉野は、仕立下ろしと見える新しい大島の揃を着て居た。杉野と、もう一人の友人の荒井と、讓吉とは、高商の同窓で社会に出てからも、同じ位の位置に就いて居た。そしてお互の間に、意識はしなかつたが、色々な点に於て競争の感情が動いて居ないでもなかつた。三人の中で、一番早く眼鏡めがねを金縁にしたのは、讓吉であつた。すると、一月ばかりして荒井が今迄の鉄縁を金に替えて居た。杉野も亦また何時の間にか、金の縁無しを掛けて居た。が、大島を一番早く着たのは、確に杉野に相違なかつた。

「何だ！ 大島を着て居るじゃないか。」と、讓吉が思わず嘆賞の言葉を洩すと、杉野は、「何うだ、全盛だろう。」と、一寸得意ちよつとそうな顔をした。そして讓吉を可なりに羨うらやましがらせた。

が、冬が去り春が来ても、讓吉に大島は出来なかつた。殊に、妊娠をして居る彼の妻の産期が、近づいて来るに従つて、色々な出費が嵩かさみ、大島を買う事をあれほど強く主張した妻も、もう諦めてしまつたらしかつた。三月に入つてから、彼の妻は到頭女の児を産んだ。讓吉は色々な出費で貯えの過半を費した。妻は猿のように赤い赤ん坊を抱きながら、「もう親の衣物よりも、子の衣物をこさえなけりやいけないわ。ねえ！ 美奈子！ お父

さんにいい衣物を沢山こさえて貰うのね。」と、赤児に頼ずりをしながら、讓吉に大島を
買う事は、まるで忘れてしまつて居るようであつた。

夫は、三月の半ば頃で、讓吉の妻が、肥立してから、まだ間もない日曜の事であつた。
その日は、全く冬が去り切つてしまつたように、朝から朗かな日が照つて居た。讓吉は、
久し振りに暢然として一日を暮して見たいと思つた。朝飯が済むと、彼は縁側に寝転ん
で、芽ぐむばかりになつた鴨脚樹の枝の間から、薄緑に晴れ渡つた早春の空を眺めて居た。
すると、

「先生！」と、声がして、いつもよく、遊びに来る隣家の子供が、兄弟連でやつて来た。
讓吉はもう三十に近かつたが子供とたわいなく、遊ぶ事が好きで、こうした来客を歓迎し
た。兄の方が、新しく買つたらしい、ピンポンの道具を持つて居た。そして、

「先生！ピンポンを買つて貰つたから、しましょう。随分旨くなつたのだから。」と、
云つた。

讓吉は、隣家の主人に頼まれて、此の子供達に英語を、ホンの一週間ばかり教えた事が
あるので、兄弟は今でも讓吉の事を、先生と云つて居た。

「あ、やろうやろう、直ぐ負かしてやるから。」讓吉は、實際、ピンポンには自信があつ

た。彼は中学時代には、ピンポンの選手であった。

「先生！ 雨戸を一つ外はずせませんか、台にするんだから。」と、弟の方の少年が云った。やがて讓吉も手伝つて雨戸が一つ、縁側の上に置かれ、そして、その中央に不完全な網ネットが張られた。が、ボールは思う通りには、バウンドしなかった。でも、段違じょうずに上手な讓吉は、相手の少年を交かわる交かわる、幾度も負かした。

相手が下手へたなので、余り興味が乗らなかったが、夫でも勝ち続けて居る事は、決して不快ではなかった。その時、ふと気が附くと、讓吉の家の門の前で、自転車けが止るような氣勢はがした。『電報！』彼は直覺的にそう思った。彼は電報を受け取る前に、特有な不安を以て、ピンポンのラケットを持つ手を緩ゆるめて、門の開くのを待った。果して夫は電報配達夫であった。が、手に持つて居るのは、電報の紙片かみではなく、赤い電話郵便の紙片であった。彼は少し安心した。彼の友人の荒井は、何かと云うと直ぐ電話郵便を利用する男であった。讓吉は「荒井の奴、又何どこ処かへ俺おれを誘いだすのだな。」と思ひながら、その赤い紙片を読み始めた。がその文句は、讓吉の夢にも予期しなかった事実を報じて居た。

『コチラノオクサマガ、サクバンオナクナリニ、ナリマシタカラ、オシラセシマス』彼は、こうした文句から激動を受けながら、差出人の名を探したが、夫は何処にも書いてなかつ

た。が、彼が差出人を確かめようとしたのは、彼にとつては余りに重大な事実を、承認する前の躊躇ちゆうちよに過ぎなかつた。彼の頭には夫が何人なんびとの死を、報じてあるかがもう的確に判つて居た。彼は広い東京に於て、オクサマと云われる人に、ただ一人しか知人を持つて居なかつた。夫は云う迄もなく、近藤夫人である。近藤夫人の死！ 夫は他の何人の死より、現在の讓吉に取つては、痛い打撃であつた。讓吉は赤い紙片を凝視したまま、一時茫ぼ然うぜんとして居た。が能く見ると、発信人新橋二七八一番と、電話番号が書いてある。之は、讓吉が、今迄に幾度も呼び出した、馴染なじみの深い番号であつた。前よりも、一層まざまざとした絶望が、讓吉の心を埋めた。

讓吉の顔が、重シリーヤス大な色を帯び始めたのを見ると、彼の妻は、讓吉の傍へ寄りながら、「何処から来たの！ 何うしたと云うんです、早く云つて下さい。私心配だわ。」と、焦せき立てた。

「近藤の奥さんが、死んだんだ。」彼は故意に平静を装つて、妻に云つた。

「へエー。」と云つたまま、妻は駭おどろいた顔をした。が、夫は夫人の急激な死に対する駭おどろきで、讓吉の感情とは、ピッタリ合うものではなかつた。

「困つた！ 近藤の奥さんに死なれちゃ！」と、讓吉は立ち上つて、押入れの方へ歩いた。

彼は此場合直ぐ駈け附ける事が、第一の急務である事に気が附いた。不斷着を脱いで外行よそゆきに着替えて居ると今迄少しも出なかつた涙が、讓吉の頬を伝つた。急激な報知しらせの為に、掻き擾かみだされた感情が静まりかけて、其処に恩人の死と云う事実が、何物にも紛ぎらされずに、彼の心に喰い込んで来たからである。

讓吉とピンポンをして居た、兄弟の少年は、ラケットを手にしながら、讓吉が涙をこぼして居るのを、不思議そうに見て居た。讓吉は、子供に涙を見られるのを可なり気恥しく思つたが、涙は何うしても止まらなかつた。

「今晚は、帰らんかも分らないぞ。」讓吉は袴を穿きながら、妻に云つた。彼の妻は産婆の家から、帰つてまだ間もない上に、雇う筈はずになつて居る子守が、まだ見附かつて居なかつた。他人の家の離座敷を借りて居る為に、要ようじん慎じんはいいようなものの、赤坊かかを抱えて一晩ひと独りひとりで留守をする事は、彼女に取つては、可なりの、苦痛に相違なかつた。彼女は色を蒼あおくして、涙ぐみそうな顔をして居た。彼女に取つては、近藤夫人の死よりも、一晚留守をさせられる事が、より大きい苦痛であつたのだ。が、讓吉が近藤夫人から受けた恩誼おんぎが、何んなに大きいかを知つて居る彼女は、讓吉がその夜帰らぬ事に就いて何等の抗議をもしなかつた。

讓吉は、電車に乗った。が、彼は先刻さつきからの涙が、まだ続いて居た。三十に近い男が、電車の中で泣いて居る事は、決してよい外觀を呈する訳ではなかった。で、彼は窓から外を見るような風をして、涙を時々拭ぬぐつて居た。

が、過去に於て近藤夫人から受けた、好意の数々を思い出す度に、稍々ややセンチメンタルな涙が、後から後からと出て来た。實際夫人は彼に取つて、此数年来生活の唯一の保証者であつた。彼と夫人との關係は『与えられる』と云う關係に尽きて居た。彼は近藤夫人に對して、何等の恩返しもしなかつた。ただ夫人の恩恵を、真正面から受け、夫に對して純な感謝の情を、何時迄も懐いだいて居りたいと、思つて居た。恩返しを試むる事は、或意味あるに於て恩を受けた者の、利己エゴイスト的な要求に基づいて居る事が多かつた。恩を受けて居る事と、夫に對して感謝して居る事とに依つて、其処に温い人情關係が作られて居る、若し恩を返してしまつたら、其処に對等の關係が生じて、以前の人情關係は、消滅してしまうのだ。また恩を返すと云う事は、恩人に何等かの事件、災害、不幸が起る事を、前提としなければならなかつた。従つて、恩返しの機会を待つ事は、恩人に何等かの事變が起るのを待つのと、余り距へだたつた心持ではないと、彼は思つて居た。

こうした心持で、讓吉は恩返しなども、少しも念頭に置かなかつた。支那の書物にある

『大恩は謝せず』などと云うのと、殆ど同じ心持であつた。只何時迄も、近藤夫人に対し、純な強い感謝の心を懷いて居たいと、讓吉は思つて居た。其上夫人は讓吉に取つて、過去の恩人であるばかりでなく、現在に於ても、讓吉の生活の、有力な保証者であつた。讓吉は、此半年ばかり生活が順調である為に、殆ど物質上の助力を、夫人に仰いだ事はなかつたが、讓吉は心の裡で、自分が疾病や災害で、生活の困難を來たす時、必ず夫人が援けて呉れる事を信じて居た。夫は讓吉に取つて、実生活上の一つの強みであつた。讓吉が近藤夫人に対する感謝のもう一つの中心は、夫人が讓吉に払つて呉れた信頼であつた。讓吉は、最初高商の秀才と云う振込みで、近藤家の世話になる事になつたのだが、讓吉は秀才でないばかりか、可なり怠惰者に近い方であつた。そして、毎年の学年試験には、漸く及第点を取る位であつたが、夫人は何時迄も、讓吉を秀才だと考え、頼もしい青年だと思つて居た。讓吉は夫人の死に依つて生活の保証の一つを失つたと同時に、彼の第一の知己を失つた訳であつた。

が、讓吉はあまりに、利己的な涙ばかりを出して居た。夫人の死が、讓吉に及ぼした打撃ばかりに就いて泣いて居た。が、夫人の死に就て、讓吉よりもっと大きい打撃を受けた人がまだ沢山あつた。夫は無論近藤氏一家の人々であつた。家庭中心であつた近藤氏の

家庭では、夫人は一家の太陽であつた。夫の近藤氏が、政党の首領として忙しい身体である為に、夫人は七人の子女から成る大きい家庭を、自分一人で支配せねばならなかつた。そして、夫人は母たる愛情を、七人の子供に平等に領けて居た。讓吉はまだ十六にしかない令嬢の雪子さんや、十一になつたばかりの瑠璃子さんが、夫人の死の為に受くる愛情生活の破産バンクセラフシイを考えると、自分の悲しみなどは恥しいほど、小さいものだと思わずには居られなかつた。

六本木の停留場で降り、龍土町りゆうどちやうの近藤氏の家の方へ歩いて居る時には、讓吉の涙は忘れたように、乾いて居た。

讓吉は、一家が涙で以つて、濡れ切つて居る所へ、自分一人涙無しに行くのは何となく気が咎めたとが。夫かと云つて一旦出なくなつた涙は、意識しては何うしても出なかつた。

が、近藤家の勝手を知つた讓吉が、内玄関を上つて、夫人の居間であつた八畳へ行くと、其処には思い掛なく夫人の代りに、主人の近藤氏が羽織袴で坐つて居た。讓吉は悔みの挨拶をしようとしたが急に発作的に起つた嗚咽おえつの為に彼は、暫くは何うしても、言葉が出なかつた。讓吉は、自分の過度のセンチメンタリテイが、一種誇張の外観を、呈しはせぬかと思つた。彼は出来る丈け早く自分の感情を抑制しようと思つたが、

不思議に彼の嗚咽は続いた。而も、その嗚咽は不思議に、深い感情を伴って居ない軽い発作で、而も余りに大げさな外觀を持つて居た。彼は自分で自分を卑しんだ。見ると、近藤氏は右の手を、額に加えて、新しく滲じみ出ようとすする涙を押えて居た。平生殆ど喜怒を現した事のない主人の、男性的な涙を見た時は、讓吉は愈々自分のセンチメンタリテイを卑しんだ。夫でも、彼の嗚咽は尚無用に続いて居た。

「離れに置いてあるから、直ぐ彼方へ行つて呉れ。」と、主人は落着いた声で言った。

彼は直ぐ奥の離れへ行つた。紫色の御召を着た令嬢の雪子さんと、瑠璃子さんが、泣顔を上げて讓吉の顔をチラリと見た。

何時もは、此の二人の令嬢を、世の中で最も幸福な女の子だと思つて居た讓吉は、今日は全く反対の考を懐かねばならなかつた。夫人の遺骸は、十畳間の中央に、裾模様すそもようの黒縮緬ろぢりめん、紋附を逆さまに掛けられて、静に横たわつて居た。讓吉は、徐ろに遺骸の傍に進んだ。そして両手を突いて頭を下げた。口の裡で夫人から受けた高恩を謝した。涙がまた新しく頬を伝つた。夫人は急激な尿毒症に襲われ、僅か五時間の病いで瘞れたのであつた。夫からの三日間、讓吉はお通夜の席に連つた。彼はお通夜などと云う仏教の形式に、反感を懐いて居たが、然し自分の悲痛や夫人に対する愛慕を、こうした形式で現わす外、何

うとも仕様がなかつた。

本当に悲しんで居る人々と、社交上の義理で悲しみを装って居る人々との間に交つて、讓吉は、自分一人の特有な悲しみを守つて居た。

殊に、夫人が仏教の信者であつたために、仏教の形式主義フオマリズムが、飽く迄もこの悲しみの家を支配して居た。坊主が、眠むような声をして、阿弥陀經あみだぎょうなどを読み上げるたびに、讓吉は却つて自分の純な悲痛の感情が、傷けられるのを覺えた。殊に、初てのお通夜の晩に、菩提寺ぼだいじの住職がお説教をしたが、その坊主は自分の説教に箔はくを附ける為か、英語を交じえたりした。

「刹那せつな即ちモーメントの出来事を……」と、云つたような言葉遣いが、讓吉の僧侶に対する反感を、一層強めた。殊にその坊主が、

「米国のロックフェリアいわ曰く『人生は死に向つて不斷に進軍喇叭らっぱを吹いて居る』と、遺さすは米国の大学者丈あつて、真理を道破して居るようです……」と云つた時には、讓吉は馬鹿々々しくなつて、席を脱はずした。恐らくこの男は詩人ロングフェロウの言葉を聞き嚙かじつて居たのを、大富豪ロックフェリアに結び附けて而もロックフェリアを大学者にしてしまつたに相違ない。讓吉は、最も厳肅な筈の、第一夜のお通夜の晩に、こうした出鱈目でたらめを云つ

て居る僧侶その者に対して、憐憫れんぴんを感じずると同時に、軽い反感を覚えるのを、何うともする事が出来なかつた。

第二夜のお通夜の人々は、第一夜の人々よりも、お通夜に相当な感情を持ち合合して居なかつた。更に第三夜になると、近藤夫人とは生前には、一度も顔を合合したことの無いような人が、眠い眼をこすつて居た。

葬式の日にも於ても讓吉は、多少の不満を感じずに居られなかつた。讓吉と、夫人との間には多くの僧侶が介在し、多くの縁者親戚が介在し、讓吉は単なる会葬者の一人として、遠くから、夫人の遺骸に訣別けつべつの涙を手向けたたむに過ぎなかつた。

京都からワザワザ上京したと云う御連枝が、音頭おんどを取つて唱える正信偈しょうしんげは、讓吉の哀悼の心を無用に焦立たせたに過ぎなかつた。

夫人が、死んでから二三週間、讓吉は、自分の心に生じた空虚を明かに感じた。夫人は彼に取つてもう掛換かけがえのない人であつた。讓吉が現在の生活を享うけて居るのは、殆ど夫人の力であつた。夫人の温情を、想い起す毎に、讓吉の心の空虚は、何時迄も消えなかつた。

夫人の三十五日の法事に、近藤家を訪うた讓吉は、夫人の妹に当る早川夫人から「お祝」

と書いた一の紙包を渡された。

「富井さん、之は姉が、貴方のお子さんに上げる積つもりで買って来た、産衣うぶぎだそうです。丁度、発病する日の朝、松屋で買って来たのだそうです、姉が生きて居おれば縫おって上げるのでしようが。」と、夫人は附け加えた。

讓吉は、夫人が最期のその日迄、讓吉の事を考えて居たことを思うと、彼は更に云いよのない感謝とらに囚とらわれた。

彼は押し戴くようにして、近藤夫人の最後の贈物を受け取った。

が、夫は決して最後の贈物ではなかった。

夫から四五日して讓吉は、社を少し早目に引いて本郷の家へ帰って来た。そして、大通りを曲つて自分の家のある路地へ這入はいると直ぐ、其処にある水道栓せんで、彼の妻が洗い物をして居た。彼が不意に、

「おい！」と声を掛けると、妻は「お帰りなさい。」とも云わない前から、

「貴方、到頭大島が出来たわ。上うえした下揃揃つてよ。」

と、嬉しそうに大きな声を立てた。

「何だ！ 俺のがかい？ 一体何うしてだ。」

と、彼は半信半疑で訊き返した。

「近藤の奥さんのお遺物かたみよ。先刻さつき、お使が持つて来たのよ。」

と、妻は洗せんい物を早々に片づけ始めた。

「えい！ 本当かい。」

と、讓吉は軽いシヨツクを感じた。

「本当ですとも、行つて御覽なさい！ 座敷へ拵かけてあるわ。」

彼は妻よりも、一足先に家へ這入つた。如何いかにも妻が云つた通り、座敷の真中に、女物に仕立てられた大島の羽織と着物とが、拵かげられて居た。裏を返して見ると、紅絹裏もみうらの色が彼の眼に、痛々しく映つた。

「いい柄だわね、之なら貴方だつて着られるわ。直ぐ解いて、縫わしにやりましょう。夫とも、一度洗張りをしなければいけないでしょうか。」と、続いて這入つて来た妻は、大島を手にとつて、つくづくと眺めて居る。

讓吉も、自分達の望んで居た、大島が出来た事に、多少の満足を感じぬわけには行かなかつた。が、一生の恩人である近藤夫人を失つて、大島の揃を得た讓吉の心は、彼の妻が想像して居る程単純な明るいものとは、全く違つて居た。

(大正七年六月)

青空文庫情報

底本：「現代日本文学大系 ㊦ 山本有三・菊池寛集」筑摩書房

入力：網迫

校正：上岡ちなみ

1999年2月2日公開

2005年10月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大島が出来る話

菊池寛

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>